

抄訳：李存信『毛沢東のラスト・バレエ・ダンサー』 第七章～第八章

星 野 幸 代

【解題】

李存信 (Li Cunxin 1961～) は山東省青島市生まれ。北京舞踊学院¹でバレエを学び、1979年公費留学生として渡米し、1981年亡命。ヒューストン・バレエ団で踊る。1995年、オーストラリア・バレエ団プリンシパルとして移籍、メルボルンに移る。1999年引退。在学中『紅色娘子軍』の小龐役の第一キャストとして出演、卒業公演は『白鳥の湖』のジークフリート。米国以降のレパートリーは『ロミオとジュリエット』のロミオ、『ドン・キホーテ』のバジルなど。現在はメルボルンで金融業に従事。

底本は、*Mao's Last Dancer*. Berkley Books, New York 2003、また中国で訳出された王曉雨訳『従農村少年到芭薈巨星の伝奇』（文匯出版社、2007）を参考にした。本稿では、彼が故郷の小学校にて11才でスカウトされ、北京舞踊学院でバレエを初めて学ぶまでを抄訳した。

第七章 家を離れて

僕が十一歳のときだ。ある日学校で、いつものように毛沢東主席語録の一節を一心に覚えていると、凍えるような教室に校長が威厳のある顔をした四人の人たちと一緒に入ってきた。みな人民服と人工毛皮の襟のついた綿入れを着ていた。

僕はすぐさま壁新聞に関する事件だと思った。二度とごめんだ。今回は何がいけなかったんだ？しかし驚いたことに校長は、その人たちが毛沢東の夫人、江青女史の代理として北京から来たのだと紹介した。毛沢東主席の革命に奉仕するためにバレエを学ぶ、才能ある子どもを選抜しに来たのだ。僕たちは全員起立して、『東方紅』を歌うように指示された。

東の空は赤く、太陽が昇る

中国に毛沢東が現れた

人民の幸福のために

フルール ハイヤー

人民を救う大いなる星²

僕たちが歌っている間に、四人の代理は通路に下りてきて、大きな目にきれいな歯並びの、可愛い顔をした女の子を選んだ。僕には全然注意を払わずに通り過ぎたが、彼らが教室を出ようとしたとき、宋先生はためらった。彼女は北京から来た紳士のうち一番後ろの人の肩をたたき、僕を指さした。「この生徒はどうでしょう。」

北京からきた紳士は僕の方をじろりと見た。「よし、この子も来てよろしい」彼はざっくばらんな調子で、完璧な標準語で答えた。

大きな眼の女の子と僕は、江青女史の代理人たちと校長室に入った。そこは石炭式の暖房がある唯一の部屋だった。暖房はバケツから不細工に作られた手作りのしろもので、四方八方に蜘蛛の足のようにパイプがつけてあった。その大層な設備にも関わらず、部屋はやはりひどく寒かった。

僕たちよりも前に、もう校長室には他の子供たちがいた。選ばれた子供は全部で十人、みな手縫いの厚い綿入れの上下を着ていたので、凍える部屋に固まって立っていると、小さな丸い雪球みたいに見えた。

「服を脱いで下着だけになりなさい。一人ずつ前へ。身体測定をして、柔軟性を調べるからね。」眼鏡をかけた男性が命令した。

みな立ちすくんだ。誰も動かない。



図1 北京舞踊学院の練習場にて。左から2人目が李存信。1976年。
(李存信提供。Mao's Last Dancer 所収)

「どうした、聞こえないのか。服を脱ぎなさい」校長が怒鳴った。

「あのう」男の子の一人がおどおどと答えた。「下着を着ていないんです。」

驚いたことに、下着を着ていたのは僕だけだった。兄たちのお下がり、母の手で何重にも継ぎはぎされたものだ。そのオーディションの間、十人が僕の下着ひと組を使いまわさなければならなかった。

幹部たちは僕たちのプロポーションを、上半身と足、首の長さ、足の指まで計った。僕は、僕より前に二、三人の生徒がテストされるのを見ていた。生徒たちは声を上げ、しり込みした。幹部の一人が僕のところへやってきて足をガニ股に開かせた。他の幹部が僕の肩を動かないように抑え、もう一人が膝で僕の背筋を支えながら、僕の膝を力任せに外向きにした。股関節の開き具合を見るためだ。瞬間、身体がばらばらになるかと思うほど痛かった。僕は悲鳴を上げたかったが、そうはしなかった。僕は意地になった。威厳を保て、プライドを失うな。僕は歯を食いしばった。

全員のテストが終わると、次の段階へ進むために選ばれたのは男の子一人、女の子一人だけだった。僕がその男の子だ。僕はわくわくしたが恐ろしくもあった。僕は何が起ころうとしているのやら分からなかった。幹部がバレエとか言っていたけれど、見たことのあるバレエというものは、映画「紅色娘子軍」³だけだった。僕はバレエが何なのかまったく知らなかったのだ。

それから2、3日、学校でも村でもそのオーディションの話でもちきりだった。はじめてうちの両親は大して興味を示さなかった。うちの一族から芸術的才能を持った者が出るはずがない。兄たちやクラスメートは僕をからかった。

「バレエ踊ってみろよ！踊ってみろよ！」

彼らは僕が何にも知らないのを知っていたのだ。僕にとって、この事件の一番エキサイティングな側面はバレエではなく、われらが敬愛する毛主席のお膝もと、北京に行けるかもしれないということだった。でも、そんな可能性はあるとは思えなかった。深い井戸のようなこの生活から這い上がる可能性は。

数週間後、第二次審査を受けるべく、僕は人民公社へ行った。今回は前もって両親に、受験者は下着着用のことという通知が来た。

この審査はもっと厳しかった。同じクラスから来た大きな目の女の子はパスしなかった。その子は、審査官に背を反らされて悲鳴を上げたので、背中中の柔軟性不適合となったのだ。次は僕の番だ。教師が僕の片足を前に持ち上げ、別の教師たちが二人がかりでもう片方の足をまっすぐ支えた。彼らは何度も痛いかとたずねた。もちろん痛い。ひどく痛い。しかし僕は絶対選ばれるんだと心に決めていたので、笑顔で答えた。「いえ、痛くありません。」彼らは僕の足を高く高く上げていく。強くなれ、強くなれ、痛みを耐えろ。僕は自分に言い聞かせた。僕は痛みを耐えた。しかし一番大変だったのは、その後

で普通に歩けるふりをすることだった。足の腱が伸びて痛くなってしまっていた。

人民公社でのこの審査のあと、僕は県、市、省規模のオーディションを通過した。毎回他の子どもたちがたくさん審査に挑み、落とされる数は多くなっていった。市での身体検査のとき、僕は赤ん坊の時に受けた腕の火傷の痕のために、もう少しで不合格になるところだった。北京から来た教師の一人がその傷跡に気が付き、医者に見せたのだ。「どうやってこの傷はできたんだね」医者は尋ねた。

僕は母の不注意だと誰にも思われなくなかったので、割れたガラスのかけらで切ったところが化膿したのだと答えた。

「変な兆候はないかね、雨の日に痛むとか。」

「いえ、全然」僕は医者を目をまっすぐ見て答えた。僕は、医者が不適合だと言いませんようにと祈った。母のために祈った。もしこの傷跡のせいで落ちたら、母はきっとひどく悲しみ、自分のせいだと思うだろう。母はもうこれ以上苦しむ必要はない。

診察が終わり、服をはおっていると、医者が北京舞踊学院から来た背の高い教師と話しているのが耳に入った。その教師は陳という、宋先生が背を叩いた人だ。

「あの子の傷はきっと成長するに従って大きくなるでしょう」医者は言った。僕の心は沈んだ。深い井戸から脱出する唯一の機会は去ったのだ。きっと不合格だろう。傷痕のせいだとは母に絶対に言うまい。怪我は事故だったのだ。母は誰よりも愛情深い、誰よりもすばらしい母だ。誰もそれを否定できない。

身体検査が終わると、ほかの能力のテストがあった。音感や、毛沢東イデオロギーの理解などだ。さらに、出自を三代までさかのぼって調べられた。毛主席の共産主義理論ではいわゆる「三つの階級」、すなわち農民、労働者、軍隊が優れた出身とみなされる。三代遡ってどこかに地主、富農や読書人を持つ子どもたちは階級の敵であり、不適合となる。江青女史は忠実なる次世代の担い手を望んでいるのだから、僕たちの出身は純潔で、安全で、信頼できるものでなければならない。

最終ハードルは、僕の家族の面接だった。審査官は家族全員に会うことを望んだ。両親、兄弟、祖父母にいたるまで、体格をチェックするためだ。僕は心配していた、きっと母が小柄だと問題視されるだろう。しかし母の朗らかな性格と、父の立派な体格が、その日を救った。

数日が経ち、数週間が経った。北京からの知らせは来ない。僕の望みは日一日と薄れていった。僕は失望し、沈み込み、無口になり、自分の殻に閉じこもった。僕は傷跡を眺めては、このせいで落ちたんだと思いこんだ。腕を切り落として、傷痕から解放されたいと思った。それでもなお、母を責める気にはならなかった。母のせいではない。僕がついていないのだ。

そのころには家族の誰もがあきらめていた。家族は僕のために残念がってくれたと言っていていい。みんないつになく優しくしてくれたからだ。それは僕をますます悲しくさせるばかりだった。

そしてある日、ちょうど父が昼御飯を食べて仕事に戻るとき、村と人民公社の幹部、県と市の幹部の一团が突然うちの小さな庭に入ってきた。うちの戸はいつも開けっぱなしだったからだ。みな満面に笑みを浮かべている。両親はお茶を入れた。数人はうちの炕につめ合って腰掛け、残りは周りに立った。幹部の一人が母に尋ねた。

「李存信という息子さんはどの子かね。」

母は僕を指さした。

市の幹部が母を振り返った。「息子さんは運がいい、江青女史の北京舞踊学院に選ばれたんですよ。」

僕は飛び上がり、家族はみんな飛び上がった。ひと月も経って！どうしてそんなことが？母は言葉を失っていたが、その顔は咲き誇る花のような笑顔だった。

「ありがとうございます、ありがとうございます」母はそれしか言えなかった。

父は幹部たちのお茶を継ぎ足し、もっと継ぎ足し、さらにもうちょっと足した。父の顔は誇りで輝いていた。

幹部たち全員がうちを後にしたとき、父が言ったのはこれだけだった。

「仕事にもどったほうがよさそうだ、また晩にな。」

しかし父は、何か目新しいものを見るような奇妙な表情で僕を見た。

みなが帰ってしまうと、母と僕はわれに帰った。母は僕を長い間見つめ、人生で初めて言葉を失っていた。とうとう母は言った。

「幸運な坊や、私は幸せだよ。今日は生きてきて一番幸せな日だよ。」

「母さんと別れたくないよ」僕は言った。

母はちょっと眉をよせた。

「ここにとどまってしなびたジャガイモを一生食べていたいのかい。坊や、これはおまえがこの苦しい生活から脱け出す幸運のチャンスなんだよ。行きなさい、行っておまえの一生にとって何か特別なことをやるんだ。農民の息子じゃない誰かになるんだよ。振り返ってはだめ。ここに何かがある？雨漏りする屋根と、兄さんたちの臭い足と空きっ腹だけだろう？」

「やめなって」僕は手で母の口を押さえた。うれし涙が母の目からあふれた。母は僕を引き寄せてぎゅっと抱きしめた。母の心臓がはずむようにドキドキしているのが聞こえた。

母は僕を長い間抱きしめていた。僕は怖くて動けなかった。いつまでもこうしていたいと思った。体中が母の温もりで溶けそうだった。

「母さんはどうする」僕はとうとう尋ねた。「いっしょ到北京に来られる？」

「一緒に来て身体を洗ってくれっていうのかい、馬鹿な子だね」母はくすくす笑いながら答えた。

「お前は幸運な子なんだ。兄さんたちだってこんなチャンスが欲しいだろうさ。母さんはお前と一緒にには行けない、でも母さんの心は一緒だよ。母さんはいつもお前を思っているよ、心でね。お前には秘密の夢があるだろう。それに従いな。それをかなえるんだよ。さあ、友達と遊びに行きな」母は僕をやさしくおしやったが、ちょうど僕が道に消えていくとき、母は叫んだ。「忘れないで、ふいごを吹くのを手伝いに戻るんだよ」

これから数日後、僕宛ての手紙が届いた。全額奨学金を授ける、四週間以内に北京へ発てと。春節の直後に、江青女史の新しい北京舞踊学院が再開するために、15名の生徒が山東省から選ばれた。七千万人以上の中から15人だ。上海から25名、北京から3名、内蒙古から1名。1972年2月、僕は十一歳になったばかりのことだった。

村中の人が私の両親にお祝いしにきた。一人人口減らしになるし、少なくともこの六番目の息子は貧しい生活環境から脱出し、結構な生活を送れる望みがあるだろう。

それからちょっと経ったある日、母の友だちの小母さんたちが、いつものように縫物やら噂話をしながらお茶を飲むために、炕に集った。そのうち一人が部屋に入ってきた僕に言った。「存信、靴を脱いで足をみせておくれ」

僕はとまどって、臭い靴を脱ぐのをためらった。

「あれま、おいで、恥ずかしがってないで」母は僕に強いた。「そんなことじゃ踊れないだろう」

僕はいやいやながら靴を脱いだ。その小母さんは僕の足を、医者が重病人を診るように手にとった。突如、小母さんは興奮して叫んだ。

「思った通りだ、ごらんよ、この三本の長い指を。この子の足は違うだろうと思っていたよ。このせいで選ばれたんだ。この三本指は先の尖った靴でもちゃんと立つのに役立つだろうよ。」

小母さんたちも母も、見る目があるねえとうなずき合った。僕が靴を履き直していると、ほかの小母さんがもっと真剣な調子で付け加えた。

「つま先で立つのはすごく痛いそうだ。あんたはとっても痛い目にあうだろうね。」

「そうさ」とまた別の小母さんが言った。「踊る人達は一日中つま先で立っているんで、つま先が血だらけになるんだって。きつと纏足してつま先で立ってるような感じだろう。」

自分の足の指が一塊にされて、祖母のようにかかどで歩く様子など想像することができなかった。僕は心配になってきた。ついにトウシューズを履かねばならない時まで、考えないことにしよう。その時になったらわかるだろう。

僕が選ばれたというニュースは公社中にさっと広まった。いつも静かな村が沸き立った。人々は僕について取りざたした。

「賢い子だ」

「幸運の相をもって生まれたんだよ」

こんな言葉に僕は戸惑った。特にきまりが悪かったのは、母の友だちにいつも品定めされることだった。三本の長い足指のほか、僕の二重瞼も及第した要因だと、おばさんたちは確信していた。村の大勢の友だちの目が僕よりも小さく見えるのは本当だったけれど、そうになると、村の人たちは友だちと一緒にいるときも僕を呼びとめて瞼を検分するのだった。中には、北京舞踊学院の教師は腕に傷のある踊り手を探していたのだ、と信じている小母さんさえいた。

その年、うちの家族の春節は格別なものだった。長兄もチベットから駆けつけたし、誰もが僕に爆竹をプレゼントしてくれた。楽しいひとこまだった。

ただ、大みそかの数日前、爆竹「二蹴足」の一つが僕の手の中で暴発した。親指の爪がはがれそうになり、血が滴り落ちた。両親は私の北京行きチャンスのがだめになるのではと心配し、贅沢なことに、化膿しないようすぐに病院へ連れて行った。北京行きがなかったら、誰も気にしなかつたらう。「ほこりでもつけておきな。」母はそう言っただろう。

家で最後の晩餐だ。家族九人が食卓を囲んだ。母はご馳走を作ってくれた。干し海老入りの卵料理、豚肉が幾切れか入った白菜料理。前菜もあった——クラゲのマリネ——それに母は貴重な小麦粉でマントウを作ってくれていた。父と兄たちは白酒を飲み、僕の輝かしい未来について熱っぽく語っていた。

僕は無口だった。おいしい料理なのにあまり食べられなかった。心配と恐れで胃がいっぱいだった。涙がとまらなくなりそうで母の目が見られなかった。

夕食が終わるとすぐ、僕はさよならを言い友達のうちへ行ってくる、と宣言した。

「なんで明日にしないんだよ」五番目の兄の存発が言った。

「明日は時間が足りないんだ」僕はうそを言った。

「うちにいろよ！お前の好きなポーカーをやろうぜ」存発は言い張った。

「いやに存信に優しいじゃないか」四番目の兄が言い、みな爆笑した。

「今晚行きたいなら急いで帰るな」母が言った。「自分の寝床でぐっすり寝ないといけないよ。北京ではいい暮らしが出来るか分からないんだからね。」

僕は炕から滑り降りて外へ出た。

「いい暮らしが出来ないだっけ？」僕が暗がりへ急ぎながら、二番目の兄が言うのを聞いた。僕は友人の家へ行く気はなかった。ただ一人になりたかった。いつもの怖くて暗

い、家々の間の道を抜け、友人のところを通ったが、入っていかなかった。お前は幸せなんだ、僕は自分に言い聞かせた。心の底から、神様が与えてくれた機会に感謝していた。でもそれと同時に、心が悲しみでおしつぶされそうだった。母、父、兄弟、友人たちと別れたくない。もう一人ぼっちになった気がする。北京ではどんなに寂しいことだろう。見上げると、星まで今晚はまばらでよそよそしく見えた。

結局僕はぶらぶらと家に帰った。兄たちはみな外へ出てしまっていた。両親はもう布団を敷いて、僕を待っていた。

「友達は元気だったかい？」母がたずねた。

「元気だったよ」僕は答えた。僕はこの晩で初めて母の目を見た。それは湿っていた。

「六兄ちゃん、今晚一緒に寝てもいい？」すぐ下の弟がたずねた。

「いいよ」僕は答えた。初めて、弟に添い寝するのが嬉しいと思った。弟とそのほかの家族をポケットに入れて北京に連れて行けたらいいのにと考えた。

その晩、弟が眠ってしまうと、僕はその満足げな寝顔を眺めた。無性に、弟がかわいくてたまらなくなった。もっと可愛がってやれば良かった。もっと遊んでやれば良かった。

母は北京に着ていくために黒いピロッドの上着を縫ってくれていたが、僕は弟がその上着を気に入っているのを知っていた。両親がもう一着作ってやる余裕がないことは分かっていたから、僕はその夜中に用足しに起きるふりをして、こっそり新しい上着をかばんから出し、行李の一つに入れておいた——弟は僕がいなくなってからそれを見つけるだろう。

その朝がとうとうやってきた。僕は眠れない夜をすごし、一番鶏の声で起きた。もう父が起きだして、僕の荷物を二つのかばんに詰め込んでいた。かばんは荒い網で出来ていたので、中身が一目瞭然だった。親戚と友人と近所の人たちが両親にくれたもの、記念品や干し海老の類の特産品だった。海老は死んだ魚のような強いにおいがして、かばんが臭くなっていた。

級友や友だちがいっしょに写真を撮れる様にカンパしてくれた。また彼らは僕に毛沢東の写真が沢山ついたきれいな日記帳をくれた。両親は記念写真をとるなんて贅沢なお金はなかったから、写真は僕にとって格別の意味を持っていた。僕の家族の写真というものほとんどなく、家族写真は一枚しかない——母と七人の息子たちとの白黒の写真だけだ。荷物の中には母の手作りの薄い布団と、タオル二枚、金だらい、ブリキのカップ、服が少し、リンゴ、梨、青島特産の「コーリャン飴」が入っていた。母はそのほかに干した蛇皮を何枚か入れてくれた。誰も僕が新しいピロッドの上着を取り出したことには気づいていなかった。

父は詰め終わると、僕にそそくさと5元を手渡した。

「もっと持たせてやりたいんだが、これで全部なんだ。しっかりやれ。李の名前を汚さないようにな。」父は仕事に出かけた。出発前にもう一度僕に会えるよう、なるべく昼には帰ってくると言っただ。

母は今朝は、僕の出発のご馳走にと、忙しく餃子を作っていた。僕は残された時間の一秒一秒を母と過ごしかつたが、出来なかつた。目が合つたら、二人とも涙が抑えられないと分かつていたからだ。だから僕は村をぶらぶらして、友だちにさよならを言つた。村の小母さんたちには、お昼ごはんのあとうちに来て、母と一緒にいてくださいと頼んだ。母が一人で悲しまないで済むようにだ。僕は祖母の墓参りをし、そのほかの祖先の前で叩頭した。土と空気の匂いをかぎたかつた。この村のすべてを覚えて、全部自分の中に取り込んでおくために。この村は十一歳までの間、僕の生活のすべてだった。嫌いだつたものまで、急にそう悪くないような気がしてきた。僕の心は宙ぶらりんになっているようだった。僕は昼食を食べに家へ戻つた。

母は僕の最後の昼食のために、餃子を沢山作つてくれていた。好物なのに、一つも食べられなかつた。感情の大きな厚い塊がのどにつかえていた。六人の兄弟たちは食卓についていた。みんな自分の餃子の碗を僕の前に押し出したが、それでも僕は何も食べなかつた。兄弟の一人一人に何か特別なことを言いたかつたが、ほとんど言葉が出てこなかつた。時間が飛ぶように過ぎ、あつという間に出発の時間になつた。母と兄弟に別れを告げなければならない。

兄さんたちがかばんを外に運んだ。父は昼食に駆けつけることが出来なかつた。今日始めて母の方をみたつたん、僕も母も涙がこみあげて来てしまつた。僕たちは何も言えず、ただ抱き合つた。すると、小母さんたちが頼んだとおりにうちへ来てくれたので、僕はすばやく道に出た。

長兄の存財が青島まで付きそつてくれ、村からの特別の荣誉として、村で唯一つのトラクターで僕たちを送つてくれることになつていた。北京舞踊学院からの通知によれば、山東省から選ばれた15人は青島市の宿舎に集合、それから十八時間後に北京行きの列車に乗る。トラクターが走り出すと、兄弟のうち三人が土ぼこりのなかを走つて追いかけてきて、泣き泣き「再見」と叫んだ。僕はもう気持ちを抑え切れなかつた。青島市まで泣き通しだつた。

トラクターの旅は一時間以上かかつた。道は悪かつたが僕は気にしなかつた。ついに集合場所に着くと、それは六つの部屋に分かれた宿舎だつた。すべてがかび臭く埃っぽく、部屋は暗くて小さな窓しかない。よそよそしく歓迎されない雰囲気だ。何か間違つているように思えて、僕は怖気づいた。両親と兄弟がもう恋しくなつてきた。

宿舎で過ごす間に、他の生徒たちと知り合うことが出来た。四人は農村から、そのほかは町出身だつた。町の生徒はどこか垢ぬけていて、僕たち農村の子供たちより世慣れ

ている。それに軍服を着た男の人がおり、「指導員」と呼ばれていた。オーディションをした教員がひとりいた。彼は僕たちを選ぶために青島へ来て、北京まで引率してくれるのだ。指導員からは、舞踊学院の僕たちに対する期待と、その規則について短い話があった。話は標準語なので、聞きとるのがちょっと大変だった。

夜になるまで、僕は朝から何も食べていなかった。それで兄がリングをむいてくれた。リング丸ごと一個を食べたのはこれが初めてだ。僕はすごく幸せで、特別な気持ちになった。僕たちはそこで夜をすごした。小さなベッドの隣に兄が寝ていることが、唯一の慰めだった。

あくる朝早く、僕たちは駅へ行くバスに乗った。駅は何百人もの人でごったがえしている古い建物だった。僕はそれまで電車に乗ったことがなかった。遠くから見たことがあるだけだった。僕たちの乗るのは蒸気機関車で、煙をもくもく上げ、すさまじい音をたてている。先生たちが群集をかき分けて電車に乗り込み、僕たちは荷物を窓から渡した。誰もが先を争って乗り込んでいるのだ。

僕は駅のプラットフォームに立っている兄と別れ、座席を見つけた。あと五秒で出発だ。拡声器が「見送りの人はプラットフォームから離れて下さい」とアナウンスした。これが兄にさよならを言う最後のチャンスだ。兄は窓越しに手を伸ばしている。僕がその手を握ると、兄は何か言ったようだ。二元、兄さんのタバコ代だ。兄はこれから二、三ヶ月タバコなしで過ごさねばならない。僕はタバコが兄にとってどんなに大切か知っていた。でも、何も言えないうちに兄はさっと人ごみにまぎれてしまった。僕はお金を握って、涙をこぼしながら、長兄が群集に消えていくのを見ていた。

電車の音が聞こえた。厚い蒸気が車両に立ち込め、唐突に汽笛が鳴ると、青島駅はゆっくりと遠くなっていった。がたんごとんという線路の音とともに、両親から遠く遠く遠ざかっていくのが分かった。僕の鼓動は列車のスピードと一緒に早くなっていった。この先二ヶ月、母にもう一度会うまでどうやって生きていったらよいのだろう。両親のわきで寝たくてたまらなかった。兄弟たちの臭い足も今ではそう悪くはないと思えた。

——— 訳者略 ———

第八章 つむじ風の中の羽

[冒頭略]

学院の活動は、すべてベルで始まる。速さと効率が肝心だ。秩序と、日課と、規則とは厳格に守られねばならない。朝は早い——五時半に起床。毛布を軍隊式に畳み、歯を磨く（初めての、奇妙で不快な経験——農村では歯磨きをしたことがなかったので、どうやって磨くのか見よう見まねで学んだ）。顔を洗っているとベルがまた鳴る。今度のベルは、五分以内にまだ薄暗い外に集合せよ、点呼するという合図だ。

間もなく、これが毎朝の日課だと分かってきた。班長が学生はみなそろっていますと報告すると、半分眠りながら近くの田野の周りを三十分間ジョギングする、これが一年間毎日続いた。僕は早朝の新鮮な空気が大好きだが、初めはそんなに早起きするのが辛かった。朝食は七時十五分に始まる。おかゆ、マントウと大根の漬物。故郷のように干し芋だけなんてことは一度もなかった。運が良ければ、卵にもありつけた。

初日の朝、朝食のあとバレエシューズと中国民族舞踊用の靴の試着に行った。まず白いランニングと、濃紺の短パンと明るい青のトラックスーツを試着した。この練習着は、今後六年間着ることになる。バレエシューズはつま先とかかどが革で覆われている。革だけ破けたら取り替えればよいので、靴本体は長く保つ。短パンはウエストと腿の部分がゴムでびったりしているので、変な心地がした。

それから、バレエ・ミストレスの曲浩先生に紹介された。曲浩先生が、僕たちをバレエシューズを試着させるため、靴工房へ連れて行くという。恐れていたときがついにやって来た。

僕たちは間もなく知ったのだが、曲浩先生は中国で一番尊敬されているバレエ教師の一人だった。彼女は五十年代に中国と交流のあったソ連の専門家の指導を受けたのだ。曲浩先生は小柄であったが、僕たちが一番畏敬の念を抱いた教員の一人だ。

靴工房で、曲浩先生は僕たちに出来るだけ小さいバレエシューズをはきなさい、はじめはきつけれどんだんだん伸びてくるからと注意した。靴工房の戸口で僕たちを向かえたのは、小さな腰のまがった親方で、恐ろしげな風貌だったが、中国で最高のバレエシューズ職人だそう。靴工房は大きくはなく、ずらりとバレエシューズが並んでおり、トウシューズもある。布や革が山をなし、床のバケツはにかわでいっぱい、周りにも飛び散っている。壁際の作業台には旧式のミシンがならび、ごたごたしていた。僕の目はトウシューズに釘付けになった。一番恐れていたことが、このきつくて小さい靴に足を縮めて入れなければならないときがきたのだ。

「男の子たち、先に履いてみなさい。」曲浩先生が大声で言った。ひとりずつ僕たちはバレエシューズを試着した。靴は小さくて、人差し指がきつくて痛かった。トウシューズはどれだけ痛いことだろう。

「よろしい、男子生徒は終わり。出て行ってよろしい。」曲浩先生は大声で言った。

「トウシューズは？」僕はたずねた。

「トウシューズがどうしたの？」先生は眉を寄せた。

「トウシューズも履いてみるんでしょう？」僕は重ねて聞いてみた。

曲浩先生は僕をちょっと見つめ、靴の親方と一緒に爆笑した。「トウシューズは女の子だけよ。」先生はくつつつ笑いながら言った。

僕はほっとしてため息をついた。おばあちゃんみたいに歩かなくていいんだ！でもこ

のときには、曲先生に与えられたこのきついバレエシューズでも、足指に一生のダメージを与えうとは思っても見なかった。

その日の午後中、僕たちは来たるレッスンのための準備に当てた。北京舞踊学院は、江青女史の関与によって、中国で一番名声の高い舞踊学校とみなされ、中国で唯一の全額奨学金の学校であった。国家が教育、食費、宿泊費、練習着など一切の費用をみられる。しかし普段着と毛布、お小遣いは親にかかっている。舞踊学院内に小さな売店があり、石鹸、ハミガキ粉、おやつなどの日用品を売っていた。江青は軍人を学院の各部門の統率者として招いており、これが僕たちを迎えに来た「指導員」で、僕たち生徒は間もなく彼らを恐れるようになった。先生たちも彼らに気を遣わねばならなかった。彼らには絶対的な権力があり、政治的、思想的な指導者なのだ。

翌朝の時間割をチェックしてみた。一時間目がバレエ、続いて京劇、中国民族舞踊の授業。毎朝バレエのレッスンがあり、そのほかの授業は順繰りになっている。昼ごはんは12時、12時半から14時が昼寝、14時から17時半が算数、国語、歴史、政治、地理、文芸理論などの科目、1時半から18時が夕食。夕食後に二時間、政治学習もしくはバレエのレッスンとなっていた。当時は知らなかったが、続く五年間、政治学習が晩の時間のほとんどを占めることになる。

翌朝8時、初めてのバレエ・レッスンが始まった。教師は背の高い陳倫で、青島へ生徒募集にきた一人だ。彼の見慣れた顔だけが慰めだった。

スタジオは広くてがらんとしており、男の子十人とピアノ教師一人しかいなかった。外は雪が降っていて、窓には霜がおりている。壁際に暖房があったけれど、ほとんど効果はなかった。僕たちは短パンとランニング姿で凍えて震えていた。

陳先生は僕たちを半円に並べさせた。

「誰か、バレエとは何か言える者は。」

僕たちは顔を見合わせた。誰も答えない。

先生は穏やかに笑った。

「バレエとは、フランス宮廷の舞踏に源を発する芸術形式だ。現在では世界的な芸術となっている。」先生は説明した。僕たちが学ぶカリキュラムは、有名なソ連のワガノワ・メソッドに基づいて決められている。このメソッドはすでに世界で最も優れたバレエ・ダンサーたちを輩出している、ヌレエフとか、ワシリーエフとか。

先生のいうことはすべて、片方の耳から入ってもう片方の耳から抜けてしまった。ダンサーの名前も、僕にとって何の意味も示さなかった。

「はじめの二年、君たちは基礎を学ぶ。基礎は非常に重要であって、私が君たちに教える。はじめはもっとも基本的な動作とレッスンを教えながら、バレエの専門用語を教え

る。全部フランス語だ。フランス人はバレエの動作のすべてに名前をつけ、今では世界中のバレエでそれが通用する。しかし、江青学長は中国語によるバレエ用語も作るようにと希望されている。だから君たちはフランス語の用語と、中国語の用語を、一緒に覚えて欲しい。」

僕は耳を疑った。「フランス語？」陳先生の話す標準語でさえ聞き取りに骨が折れるのに、フランス語だって？僕はしかたなくバレエの動作の名前を、他の方法で覚えることにした。陳先生が「タンデュ」と言ったら、僕は「糖九 [アメ^{タンジョウ}九つ]」と覚え、「パンシェ」と言われたら「螃蟹 [カニ^{パンシェ}]」と覚えるのだ。中国語で適当な言葉に置き換えられないものもある。「アラベスク」にいたってはお手上げだった。「アラ^{アーラーベイスクー}貝斯克」と当て字にしてみたところで、覚えにくいしばかばかしい。困った末に、もらった日記帳にこの名前の動作を書きあらわそうとしてみたが、僕の語彙は乏しすぎる。そこで、代わりに絵で表すことにした。それしかできなかった。人に聞くのは恥ずかしかった。教養のない貧農の子だと笑われるかもしれない。

最初の授業の日は特別寒く、小さくてきつい靴を履いていたので、足指の感じがなくなってしまった。陳先生は僕たちをまっすぐ立たせ、バレエのポーズをとらせた。第一、第二、第三、第四、第五ポジション。僕はばかばかしいと思った。こんな醜い姿勢をとらせるなんて、頭がどうかしているんじゃないか。江青学院長は、僕たちがよちよち歩くアヒルみたいな演技をしたら、居眠りしてしまうんじゃないだろうか？僕は足にいうことを聞かせるのが大変だった。内側へ戻ってしまう。

スタジオは湿っぽく、埃っぽかった。辺りは汗とカビのにおいがした。陽の光が差し込んでくると、空中にいっぱい埃が浮かんでいるのが見えた。木の床は古くてひびわれているので、足が滑らないように、陳先生はジョウロのように穴の空いた鉄製ポットで水をまくように教えてくれた。後ろに歩きながら水をまくには首をねじらなければならない。北京舞踊学院の学生たるものは、これをすばやく効果的にできなければならないのだ。

この最初の授業はとつても不思議だった。僕たちは腕を横に、肩の高さに伸ばし、手の平は前に向ける。陳先生は僕たちの間を歩いて、腕を下に押しは、先生の力に負けないように保てという。僕たちは、先生が休んでよろしいというまで、このポジションを数分間続けた。先生は、これは腕力を鍛える動作で、この訓練によって腕は柔らかに、力強く見えるようになるのだという。これはダンスじゃない、と僕は心の中で言った。はねるとか飛ぶとかはしないの？こんな苦行に六年間も耐えられるだろうか？足がつりそうだ。トゥシューズを履く女の子たちは、どんなにつらいことだろう。

はじめのレッスンは二時間だったのだが、一生続くかと思えた。ベルが鳴ってこの恐ろしい靴を脱ぎ、こわばった指を伸ばしたくてうずうずする。街に出て走り回りたい、

農村で裸足で駆けたように、また友だちととっくみあいたい。踊りたくない、外に出て雪ダルマを作って、雪合戦をしたい。僕は思った。 [第八章訳未完]

訳注

- 1 北京舞踊学院は1954年創設、学費無料。戴愛蓮（1916-2006）が初代学院長。1959年、卒業生を団員とする中央バレエ団創設。本文にある通り、文化大革命が起こってから、江青が学院およびバレエ団の運営の実権を握り、戴愛蓮らは労働改造に送りこまれた。
- 2 李有源作詞、もとは民謡。毛沢東と共産党を称える歌。文化大革命中、事実上の国歌であった。（加々美光行監修『文化大革命大事典』中国書店1997）
- 3 1964年中央バレエ団が北京にて初演。

梁信の脚本に基づき、李承祥、王希賢監督、呉祖強、杜鳴心、王燕樵、施万春、戴宏威作曲。ストーリーは、海南島の極悪地主である南霸天家の使用人・呉清華が逃亡し、追手につかまったところ紅軍の幹部と通信員（小龐）に救われる。呉は紅色娘子軍に加入し、共産黨員へと成長するという物語。（彩図本『辞海』上海辞書出版社1999、第三巻 p.3102）

映画『紅色娘子軍』は謝晋監督、1961年第一回映画百花賞において最優秀作品賞、最優秀女優賞等を授賞している。（張駿祥、程季華主編『中国電影大辞典』上海辞書出版社1995、p.365）



図2 松山バレエ団による『紅色娘子軍』、1974年。主演・森下洋子。（『舞踊歴50年記念 世界のプリマ森下洋子』p.78 文園社 2000年）